

わんぱく文庫は35年の幕を下ろしました。

わんぱく文庫の世話人の35年間の思い出

ファイナルコンサートの報告

図書館での今後の本のかり方について



2016年1月

わんぱく文庫は35年の幕をおろしました。

福山 恒子

ファイナルコンサートに沢山のわんぱく文庫の子どもたちが来てくれてうれしかったです。賛助会員のみなさまも帰りがけに声を掛けてくださいました。

初めてお会いした方もあり、皆さん最後だと思い声を掛けて下さったのでしょう。1年生の久禮くんが、「わんぱく文庫がなくなるときいて、なみだがポロリとでました。もうあえないですか。どこかでえるといいな。おかあさんは、えるよといつてくれました。」何遍も書きなおした点字の手紙がきました。ありがとう。私も涙がでました。

初めて盲人情報文化センターで文庫を開いた日から35年たちました。沢山の方たちに助けられてここまでやってこられたのです。子どもたちにもいろいろな事を教えられました。良い出会いがいっぱいありました。約300人の子どもたちがわんぱくに登録してくれました。熊本、岩手、岡山、東京と遠くの子どもから、本を貸してといつきました。その頃は見えない子の本が手にはいりにくかったのです。

子どもの本専門店で小さな女の子にであったことが、わたしの行く道を示唆してくれました。杉本久美ちゃんに木馬館（子どもの本専門店）であったのは、1980年の8月頃でした。

「これだけ本があるのに見えない子の本はないですね。この子にも本をよませたい」お母さんのつぶやきを聞いたときはショックでした。文庫の先輩である井関さんに話しました。二人とも盲人情報文化センター（ICCB）の録音図書のボランティアだったので話しが早かったです。1981年1月茨木市でこども文庫を開いていた井関さんと二人で見えない子の文庫を作ろうとよびかけのチラシを作りました

たしか、新聞に紹介されたと思います。大阪府子ども文庫連絡会の仲間数人が参加を申しあげてくれました。新聞を見て文庫のお兄さんになって遊んでくれた北島君が、電話をく

れた時はうれしかったです。(以後文庫の日には、北島君の友人の仲間君と、はらはらするぐらい乱暴に遊んでくれました。久美ちゃんのお母さんが子どもたちは「あはれたいのですね。親は危ないからと注意ばかりしていました。」と言われたのが印象にのこっています) I C C B が盲学校と未熟児網膜症の会にチラシを送ってくれました。

1月15日案内のチラシをみて何人きてくれるか、どきどきしながら待っていました。15人の子どもたちがきてくれました。本屋で会った女の子もきてくれました。私は奇跡だと思いました。

子どもたちは、お話を乾いた砂が水を吸うように目を輝かしてきいていました。
集まった人々は、改めて文庫を作ろうと決心をしたのでした。

駄目でもともとと思って当時の岸知事に手紙をだしました。なんと出席したいとお返事をいただいたのです。知事は子どもたちとお話を聞かれ、楽しんで下さいました。秘書に催促されるまで、立たれなかったのを覚えています。以後岸知事には、いろいろ相談に乗っていただきました。

1984年関西二期会の事務局長さんとある会で一緒にした時わんぱく文庫の子どもたちの話をしたら、コンサートを開きましょうといつてくださったのです。初めて聞く素晴らしい歌声に集まつた子どもも大人も感動して涙を出している人もいました。以後子どもたちに本物の音楽をと毎年(30回)ひらいてきました。沢山の方たちにご協力をいただきました。

1996年 新しく建った府立中央図書館にわんぱくの拠点を移すことができました。
子どもたちが図書館の利用者になる…長年の私達の夢でした。

図書館の児童室の書架に点字の本が並んでいる。見える子と一緒に本を借りる泉谷君兄弟がカウンターで嬉しそうに本を借りていた笑顔が忘れられません。ここに来るまで図書館の職員の皆さんのがどんなに頑張って下さったか。感謝してもしきれません。有難うございました。

選書のことなど司書の皆さんには随分たすけていただきましたし、図書館側にもクリスマス会やコンサートなどで便宜を図り協力をして頂いたのに残念ですが、イベントをする会場が借りにくくなり、世話人も高齢化の波が押し寄せてきました。

でも日本で視覚障がい児の文庫はわんぱく文庫だけです。
「ここには私の読める本がいっぱいある お母さん」と初めて文庫に来た明石の昌子ちゃんも今では東京都の英語の先生になっています。彼女の喜びの声が私たちの喜びでした。みんなで万博公園に遊びに行たり淡路島、オルゴール館、フェロウ村に行ったりしたことやクリスマス会でだしものを発表したり楽しいことがいっぱいありました。書いていくと淋しくなります。もう、わんぱくの皆さんと会う機会がなくなるのかと思うと…

皆さまのしあわせを祈っています。

福山恭子

